

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18520379  
 研究課題名（和文）副詞からみたミニマリスト・プログラムの理論装置：言語理論の構築に向けて  
 研究課題名（英文） The theoretical devices in the Minimalist Program from the perspective of adverbs: Toward constructing linguistic theory

## 研究代表者

水野 江依子(MIZUNO EIKO)  
 名古屋工業大学・工学研究科・准教授  
 研究者番号：30342033

## 研究成果の概要：

研究計画に従い、ミニマリスト・プログラムの枠組みにおいて、副詞について通時的・共時的観点から研究を行い、従来とは異なるいくつかの分析結果を得ることができた。

通時的には、コーパスを用いてデータを蓄積し、副詞の歴史的発展について、説明を与えることができた。また、帰結として言語の基盤となる節構造について、周辺機能範疇(Mood, Mod)などの妥当性を示すことができた。さらに、周辺機能範疇と核機能範疇という二種類の機能範疇の違いが歴史的な背景において説明可能となった。

共時的には、おもに英語の認識様態副詞、発話行為副詞の意味的・統語的ふるまいについて再度検証した。そして、従来主流となっていた *specifier-based analyses*, *scope-based analyses* とは全く異なる種類の *phase-based analyses* を提案した。これは、副詞の分析において誰も発表していない新しい分析法である。

また、提案された節構造が理論的枠組みを超えて妥当なものであるという知見を与えることができた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	360,000	2,260,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：副詞、認可、フェイズ、c 統御、機能範疇

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 採用する理論的枠組の背景

1950年代に始まった生成文法は、様々な理論的変遷を経てミニマリスト・プログラムに至っている。とりわけ、今世紀に入ってから極小主義は生体の一器官として実存する言語機能の中身を明らかにすることをさらに推し進めた形になってきており、その中で、言語固有のメカニズムを極力少なくし、生物学的に言語能力を説明しようという方向に進んでいた。その結果、普遍文法は、ことばから独立した生体システムの原理のみから構成されている、という考え方に沿って理論装置が提案されてきている。たとえば、句構造を説明してきたX<sub>bar</sub>理論は破棄され、構造構築操作として、唯一マージ (Merge) のみが提案された。これにより、移動操作も独立した操作として考えられる必要がなくなった。マージを駆動するものとして素性間の一致(Agree)が重要な役割を果たしてきている。さらに、経済性の観点から最小の単位としてはフェーズ(phase)が取り入れられた。1990年代に始まったミニマリスト・プログラムは、このように、急速に理論装置を生物学的基盤を持つものへと変化させていった。

### (2) 副詞研究の背景

生成文法における副詞の研究は1970年代から行われていたが、ミニマリスト・プログラムと関連付けて研究を行った代表的なものはCinque (1999)である。Cinque以降、ミニマリスト・プログラムの観点から副詞を分析しようという流れがでてきていた。そしてCinqueの研究を中心として、様々な議論がなされ(cf. Ernst 2002)、かつてないほど副詞が言語研究の中で重要なテーマとなっていた。しかしながら一方で、それまでの研究は、副詞の振舞いのある一側面、あるいは理論装置のある

一部のみを暫定的に利用しているに過ぎず、理論装置の妥当性を示す言語データとしての中心的役割を果たすには十分なものとはいえなかった。

## 2. 研究の目的

筆者はそれまでChomsky (1995)のミニマリスト理論に基づいて副詞の研究を行ってきたが、1995年のミニマリスト・プログラムと現在のミニマリスト・プログラムは上記のように大きく変化している。本研究は-ly副詞を中心に、副詞要素を研究の材料とし、言語の理論装置を再検証することによって、人の言語の本質とは何かを探ることを目的とするものである。

本研究の特色の一つは、ミニマリスト・プログラムの理論装置を構築するための言語データとして副詞要素を用いることである。これまでの言語研究において、副詞は動詞や機能範疇に付加するだけの例外的言語要素としてみなされており、言語理論の構築の中で重要な役割を果たしてこなかった。ミニマリスト・プログラムにおいても理論装置の妥当性(あるいは非妥当性)を示す言語データとして体系的なものとして中心的役割を果たしていない。したがって、本研究によって、副詞要素を言語理論の構築のための基盤として中心に据えることによって、言語システムに新しい視点、枠組みを与え、より妥当な理論を構築できるものと考えている。

## 3. 研究の方法

以下の手順で研究をすすめた。

(1) これまでに論じられている生物学的基盤に基づいたミニマリスト・プログラムについて、文献を参考にして精査する。

(2) 言語理論の経験的基盤として、英語および日本語の副詞の言語事実の記述を行う。これまでの自らの研究で蓄積されている英

語について、現代英語に加え、歴史的な資料を充実させる。生物学的な観点とは進化という問題も内包しており、この点から副詞の歴史的発達を観察することによって、言語の進化に関わる理論に妥当な知見を加えることが予測される。また、欧米の諸言語の言語現象をもとにしている理論に対し、日本語の研究から新たな知見を加えることにより、より妥当な理論の構築が可能となる。

(3) 上記の情報をもとに、生物学的基盤に基づいた理論装置が、副詞の統語的・意味的特性にどのように還元できるかを明らかにし、ミニマリスト・プログラムの理論装置の研究を深化・充実させる。

#### 4. 研究成果

##### (1) 歴史的観点から得られた研究成果

ヘルシンキ、ブラウン、FOB、FLB等のコーパス資料から基盤となる認識様態副詞の通時的・共時的言語データを收拾し、副詞の分布毎に分類した。これらの研究から次の知見を得た。

①Chomsky (2005)におけるミニマリスト・プログラムの枠組みのもとで、副詞の認可方法を再検証し、認識様態副詞は主要部となる周辺機能範疇によって一致(Agree)のもと認可されるということが新たに提案できた。この提案は副次的に周辺機能範疇の存在を支持する立場を明らかにできた。

②コーパスを用いた認識様態副詞の歴史的発達を分析することによって、認識様態副詞は初期近代英語期に出現したこと、分布の変化が意味の発達に平行していることを示すことができた。これを元に、周辺機能範疇が近代英語期に出現したということを提案し、上記1で提案したミニマリスト・プログラムに基づく副詞の認可システムの妥当性を歴

史的観点から補強することができた。

【通時の研究に関わる成果は下記雑誌論文②、⑤、⑥、学会発表①、図書①において発表】

##### 2. 共時的観点から得られた研究成果

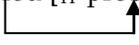
##### ① よりprimitiveな認可方法の発見

特に英語の認識様態副詞・発話行為副詞の平叙文および疑問文における統語的振る舞いからc-commandという、よりprimitiveな構造型およびミニマリストの核となるPICの相互作用によって副詞の分布を説明できるのではないかとの知見が得られた。例えば、(1)の文法性の違いについて、以下のように説明ができる。

(1) a. Probably, John will have read the book.

b. \*John will have read the book probably.

(1a)は該当する認可子Mod<sub>epistemic</sub>によってc統御されることによって認可され、適格となる。一方、文末に現れる認識様態副詞はフェイズvPによって認可が阻止されるため、非適格となる。

(2) a. [Mod [<sub>TP</sub> probably [<sub>T</sub> John will have  

read the book]]]

b. [Mod [<sub>TP</sub> John will [<sub>vP</sub> have read the book]]]

また、この研究によってミニマリスト・プログラムの理論装置において意味解釈に関わる言語事実においてもc-commandという構造型が必要であるという副次的成果も得られている

さらに、これまで散逸していた平叙文・疑問文におけるデータを統一的に示すことによって副詞の分布についての特性がさらに

明らかになったという副次的成果も得られている。

【この研究成果については雑誌論文①、審査中論文（書評：Haumann (2008) *Adverb Licensing and Clause Structures in English*）において発表】

② 談話構造との関連性から節構造の妥当性を補強

提案されている理論装置が、単にミニマリスト・プログラムという枠組みだけでなく、談話構造という別の枠組みにおいても妥当ではないかということを示唆することができた。具体的には、周辺の機能範疇を含む分節化された節構造 (cf. Mood > C > Mod > T > vP) が、談話構造に対応する階層構造を持っていることを論じた。これによって、ここでの理論装置がより普遍的な意味をもつということが示された。

【この研究成果については、雑誌論文④、研究発表②において発表】

③ 日本語データとの関連性

日本語データを先行研究から採取した。その中で、Mizuno (2003)で英語のVP副詞を対象にした分析において、副詞をよりprimitiveな意味素性に分析しその意味素性が対応する機能範疇に投射することによって統語的・意味的振る舞いの違いが説明できることを示したが、日本語データにおいても同様の分析をすることによってそれぞれの特徴が説明できるのではないかと知見を得た。これは、従来副詞の分析は、英語を代表とする印欧語に焦点を当てて論じられてきたものが、日本語の副詞から理論装置になんらかの貢献ができるのではないかと可能性を示唆

することになる。この日本語の研究についてはもう少し発展が期待され、今後の研究として取り組みを続けていく予定である。

【この研究成果は雑誌論文③において発表】

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①水野江依子 A Phase-based Analysis of Adverb Licensing, 『言語研究』2009, 査読有(掲載決定)

②水野江依子 書評「Ian Roberts, *Diachronic Syntax*」, 『近代英語研究』25, 157-164, 2009, 査読有

③水野江依子 書評「仁田義雄：副詞的表現の諸相」*New Directions* 26, 81-87, 2008, 査読無

④水野江依子 「副詞からみた統語構造と発話の階層構造」『中部英文学』27, 53-58, 2008, 査読有

⑤水野江依子 「現代英語における認識様態副詞の分布：*probably*を事例として」、*New Directions* 25, 113-122, 2007, 査読無

⑥水野江依子 A Corpus-based Study of Epistemic Adverbs in Early Modern English, *Exploring the Universe of Language: A Festschrift for Dr. Hirozo Nakano on the Occasion of His Seventieth Birthday*, 145-158, 2007, 査読無

〔学会発表〕(計2件)

①水野江依子、「副詞からみた統語構造と発話の階層構造」、日本英文学会第59回中部支部大会シンポジウム、2007. 10. 8、愛知淑徳大学

②水野江依子、「定形節における機能範疇の出現：文副詞の認可を中心に」、日本英語学会第24回大会シンポジウム、2006.11、東京大学

〔図書〕（計1件）

①水野江依子、音羽書房鶴見書店、*Ivy Never Sere*, 2009, 355-370.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水野江依子

名古屋工業大学 工学研究科

准教授

研究者番号 30342033

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者